

Improve

認定病院の改善事例紹介シリーズ

Vol.15
一般病院2

紹介事例

独立行政法人 国立病院機構

四国こどもとおとなの医療センター
誕生から看取りまで、すべての患者さんと向き合う

医療を見つめる第三者の目。

それが病院機能評価です。



人の安心、医療の安全 JQ
公益財団法人 日本医療機能評価機構
Japan Council for Quality Health Care

<https://jcqhc.or.jp/>

日本医療機能評価機構

日本医療機能評価機構は、国民の健康と福祉の向上に寄与することを目的とし、中立的・科学的な第三者機関として医療の質の向上と信頼できる医療の確保に関する事業を行う公益財団法人です。



病院機能評価は、患者さんが安心して安全な医療を受けることができるように「病院の改善」を支援する仕組みです。サーベイヤーと呼ばれる専門調査者が病院を訪問し、病院の取り組みを評価します。病院外部の第三者機関による評価を上手く活用することで、これまで院内では気付くことができなかった課題や強みなどを明らかにすることができます。

評価の結果、一定の水準を満たしていれば「認定病院」となります。評価を受けることで明らかになった課題を改善し、認定を更新していくことで、継続的な質改善活動を行うことができます。

評価は、病院の特性に応じた7つの機能ごとに行われます。



第15号では『一般病院2』版の病院機能評価を活用して改善に取り組んだ事例を紹介します。

誕生から看取りまで、すべての患者さんと向き合う

独立行政法人 国立病院機構 四国こどもとおとなの医療センターの場合……

成育医療、成人医療の2つの病院を統合して香川県善通寺市に2013年に誕生。病院統合の難しさを乗り越え、医療機能評価受審を機に本当の意味で1つの病院に



当院は小児病院と成人病院を統合して「利他の心を持って、よその病院にはない、病院らしくない病院を作りたい」というコンセプトのもとに誕生しました。利他の心とは他人を思いやる心です。私たちはあたたかい心と思いやりを持って、いつもみなさまと共にあゆみます。

(中川義信院長)

開院5年、病院機能評価を初めて受審して3つの認定を同時に取得

遠く讃岐平野が広がる香川県善通寺市にある「四国こどもとおとなの医療センター」は、2013年に香川小児病院という小児病院と、善通寺病院という成人の病院が統合されて開院した。

この統合によって、その名の通り子どもから大人まで、つまり、生まれる前の周産期から子ども時代、思春期、青年期、働き盛り、妊婦、老年期、老人の看取りに至るまで、ひとのライフサイクルのすべての段階の医療を1つの病院で継続的に提供できる病院がこの地域に誕生した。

「周産期から思春期の小児科に専門的な診療科があり、珍しい症例の患者も多く、県を超えて広い診療圏があります。また、成人医療では内科と外科の両方がある循環器センターや、脊椎手術が可能な骨・運動器センターのほか、女性医療センターや女性専用病棟などがあり、特色ある医療を提供できています」と横田一郎副院長。

精神科も備え、救急車の受け入れも年間4000件を超える四国全域の基幹病院となっている。

開院から5年。2018年2月に病院機能評価を初めて受審し「一般病院2」「慢性期病院(副)」「精神科病院(副)」の3つの認定を同時に取得した。

「病院らしくない病院づくり」をコンセプトに患者さん、職員の評価を重視



壁面に描かれているのは病院のモチーフである楠(クスノキ)。院内は明るく広い空間に、彩りが加えられている

統合前の香川小児病院の元院長でもあり、この病院を作るための準備に2003年から関わっていた中川義信院長は「新病院は地域に受け入れられる、よその病院にない、画一的ではない、病院らしくない病院にしようというのがコンセプトだった」と明かす。

確かに、病院の外壁には楠(クスノキ)の大木と若木

をモチーフにしたペイントが施され、入り口を入ると明るい空間には解放感がある。院内の壁面のあちこちらには、花や鳥、水玉模様などが描かれ、よくある病院のイメージとは一線を画す。これらは病院環境をより良くするための「ホスピタルアート」と呼ばれるものだ。

「病院らしくない病院づくり」を目指した理由を中川院長に尋ねると「その方が楽しいじゃないですか」という答えが返ってきた。「基本、仕事というのは楽しくなければいけない。そうでないと続かない」と中川院長。

「病院を一番評価してくれるのは患者さん。患者さんが来てくれるかどうか。二番目は職員。職員が気持ちよく働けるかどうか。三番目が第三者的な評価です」と中川院長は話す。

目指すのは患者さんが来てくれて、職員が気持ちよく働ける病院づくり。外壁や院内に描かれた「ホスピタルアート」もそのための一つだった。

問題解決にも役立つホスピタルアート「療養環境の整備」項目で高評価に

このホスピタルアートは実は、病院内の問題解決にも役立つものだ。

外来で患者さんに看護師が「次は放射線科に行ってください」「検査科に行ってください」と、放射線科(=Radiology)の案内表示「R1」や検査科(=Laboratory)の「L1」を指し示すが、高齢の患者さんには理解してもらえないという困りごとがあった。



放射線科の案内表示にお花のマーク、その奥の検査科には葉っぱのマークが添えられた

そこで、看護部はホスピタルアートディレクターの森合音さんに相談。高齢者に分かりにくいアルファベットではなく、お花と葉っぱの絵を描いて案内表示とし、「お花の絵のところへ行ってください」「葉っぱの…」という案内に変えたところ、トラブルは解決した。

案内表示はほんの一例だ。院内の各所にあるホスピタルアートについて、今回の病院機能評価では「病院の特色としてホスピタルアートを活用した療養環境の整備に秀でている」という高評価を得ることになった。

「ホスピタルアートは作品のことを言うのではなく、何か問題や困りごとが起きた時に、職員の意見を聞きながら、アートという手段で、みんなで一緒に病院づくり、環境づくり、改善をしていくという考え方なんです」とホスピタルアートディレクターの森合音さんは話す。

【看護部】統合の混沌の日々を越え、受審が新たな一歩の良いタイミングに

「小児病院と成人病院という、まったく違う2つの病院の統合後、初めは混沌の時期が続きました」と、病院統合時に副看護部長だった武森八智代・現看護部長は当時を振り返る。

「統合当初は1つの看護部の中に、2つの異なる文化や価値があり、その違いにジレンマが生まれ、看護手順1つにしても少しずつ違い、最初の1年は本当に混沌とした中で過ぎていきました」。

今回の機能評価の準備に当たった金子真由美・副看護部長は「統合して5年経ち、成育と成人の2つがうまく融合しているか確認する機会となりました。」と話す。

「看護の手順は基本、成育も成人も同じですが、例えば注射一つをとっても、大人ならじっとしてしてくれるところを、子どもは動いてしまう。発達段階に応じた言葉かけが必要です。そうした手順の違いが抜けていたり、統合前の病院名が残っていたり。手順を一つひとつ共通の言葉で整えていく過程を踏んできました」と話す。

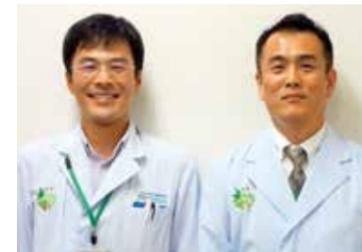
また電子カルテも、成育病棟と成人病棟では指示受け

【薬剤部】質も安全性も高い方にシフトできました

「病院機能評価の受審が契機になり、目標が明確になって業務の効率化や、手順の見直しができて良かったです」と話すのは薬剤部の仙波靖土副部長だ。

例えば、注射の払い出しでは受審を機に専用カートを購入して運用を整えた。また、受審のために各部署間で情報共有しやすくなり、互いの業務を知ることで無駄を省き、メリハリが利くようになったという。

「今までやっていたことをやめるというのは抵抗がありますが、お互いの状況がわかれば工夫できる。統合後、初めは業務を動かすことが最優先でしたが、今回の受審



を機に、質も安全性も高い方にシフトしたと思います」。

立花広志薬剤部長(写真右)
仙波靖土副部長(写真左)

の方法が異なっているとわかり、共通のやり方を決め、取り組むことになった。電子カルテの機能を仕様書に立ち返って確認し、新たな操作方法の周知徹底のために繰り返し確認作業を行った。

「機能評価を受審することで、もう一度、ディスカッションする機会となりました。統合後、お互いのことを考えられるような力が着いてきて、この受審を機に改めて考えることができたという意味ではとても良いタイミングでした」と言う。



上段左から明崎祐子救命救急センター師長、明野恵子副看護部長
下段左から金子真由美副看護部長、武森八智代看護部長、秋田倫枝副看護部長

【教育研修部】受審を機に全職員の教育システムを構築

教育研修部の近藤秀治部長は「教育は各部署がそれぞれ行っていますが、部門だけでなく病院全体で教育活動に取り組んでいこうと、今回の受審を機に病院全体、全職員の教育システムを作りました」と話す。

「社会や病院、個人としても一番基本になる部分はマナーだと考え、全職員向けにマナー研修も行いました。そして院内としての教育システムができたので外国人の研修を受け入れられるようになり、今年だけでもタイやザンビアからの研修を受け入れています」。

医療支援が必要な国への国際貢献に役立っています」



近藤秀治教育研修部長(写真右)
稲沢義則人材確保対策室長(写真左)

病院機能評価受審の効果



病院全体が同じ目的に向かって1つに

中川 義信 院長

今回、この審査を受け、病院全体が1つの目的に向かって共同で作業をすることで、病院全体が1つにまとまる効果があるのではないかと考えました。

一般病院2、慢性期、精神科と3つを一度に受審したのは、病院として、どれか1つではなく、すべての機能で評価を得られる実力を備える必要があると考えたからです。もともと受審は考えていたので、ようやくその時期が来たかなと。また、日本医療機能評価機構は全国の病院を評価しているので、自分たちの病院がどうレベルにあるのか、どう評価されるのかというのを知りたかったというのも受審の理由です。

結果として、病院が1つにまとまり、自分たちの病院がどのレベルにあるのかもある程度わかりましたし、また、他の病院にない機能を持っているとお褒め頂き、ある程度自信を持つことができました。

私としては「病院らしくない病院を作ろう」というのが1つの目標でしたので、この病院づくりが正しかったのか、間違っていたのかという評価もいただき良かった。そういう面からいうと、今回評価を頂き、こういう病院もありかなということ安心し、病院づくりは間違っていなかったという安堵感がありました。

この写真の書「利他の心」は私が書いたものです。利他の心とは他人を思いやる心。一つは患者さん、もう一つは職員です。そしてその家族。ようするに地域の人みんなに、利がいくように他人を思いやる心をもってくださという意味です。これが私の病院運営のベースです。

職員がステップアップを共有できた

横田 一郎 副院長

認定を受けるために頑張ったことによって、病院として組織として、いろいろな部分のクオリティが確実に上がったのではないかと思います。

自分の病院がどういう病院であるべきか、どういう機能、どういうことをやるべき病院であるか、何が足りないかを自分たちで考え、評価して頂いて、自分たちのそれぞれの機能を高めていく機会になりました。一皮ステップアップして、それ自体を病院の職員が共通体験として共有できる。達成感を皆で共有できたのは職員にとって良いことだと思います。今度は人が入れ替わっても、伝わっていくようにしないといけないと考えています。

改善継続していくアンテナが高く

武森 八智代 看護部長

自分たちの今の看護の状況を見直す機会になり、認定された結果も大変うれしいのですが、取り組みの過程とそれを継続させていく役割が自分たちにあるのだということ意識する機会になりました。

まだ評価が出ていない時期に「認定評価はまだか」と看護部の皆に訊かれて、その理由を尋ねたところ「もし悪い評価があったらただちに改善しないとイケない。しっかり取り組みたいから早く評価を知りたい」と。そして「今度は継続するためのチームとして取り組む」と言って高評価を頂いた多職種カンファレンスを増強したり。受審を機に皆が1つになり、改善継続していくことにアンテナが高くなっています。

高評価が次のハードルを下げ、その先へ

金子 真由美 副看護部長

受審して良かったと強く思ったのは多職種カンファレンスのことを高く評価していただいたこと。多職種カンファレンスの重要性についてサーベイヤーの方から助言を得て、私たちがこの地域で求められているものについて考え、今回評価して頂いた機能を維持したい、助言を改善したいと考えるようになり、機能評価のあと、改善点について仕組みを作り、意識的にもう一步踏み込んで、積極的に多職種の意見を聞くカンファレンスを運営するようになりました。受審して終わりではなく、また5年後もあります。高評価が次の行動のハードルを上げて、さらにその先につながっています。

編集後記

善通寺駅から自動車でも約5分のところに病院はありました。古い街並みの中、明るい壁画が目に入ってきたのが印象的でした。

院内には至る所にホスピタルアートが施され、その空間にただで心地よさを感じました。院長先生が目指した『病院らしくない病院』をまさに感じることができ、院内の様々な声から一つひとつ改善に取り組み、その形となったのがアートとして表れていました。

これからもImproveでは、改善事例はもちろんのこと、病院の皆さんの想いを広くお伝えてしていきます。
(芳賀 友梨)

バックナンバーのご案内

バックナンバーは評価機構のホームページよりご覧いただけます。

<https://www.jq-hyouka.jcqhc.or.jp/tool/improve/>



スマートフォン・タブレットはこちらから



- Improve Vol.14 慢性期病院 (2018年9月発行)
《紹介事例》医療法人 茜会 昭和病院
「在宅へ返す」高齢者医療で地域に貢献する
- Improve Vol.13 精神科病院 (2018年5月発行)
《紹介事例》医療法人 同和会 千葉病院
—「最善の行動と信頼」を第一に患者と向き合い続ける—
- Improve Vol.12 一般病院2 (2018年3月発行)
《紹介事例》慶應義塾大学病院
こころをひとつに～「患者目線」の医療に向けて～
- Improve Vol.11 一般病院1 (2018年1月発行)
《紹介事例》社会医療法人 南部病院
まなびあい、たすけあう～病院内から地域へ～
- Improve Vol.10 リハビリテーション病院 (2017年7月発行)
《紹介事例》特定医療法人 自由会 岡山光南病院
—患者さんに「安心」を届けるトータルマネジメント—

病院概要

平成31年1月現在

病 院 名	独立行政法人 国立病院機構 四国こどもとおとなの医療センター	病 院 長	中川 義信
所 在 地	〒765-8501 香川県善通寺市仙遊町2-1-1 Tel. 0877-62-1000		
開 設	2013年(平成25年)5月1日	病 床 数	689床
標 榜 科 目	小児科、児童精神科、小児外科、産科、内科、循環器科、外科ほか		

Improve 認定病院の改善事例紹介シリーズ

Vol.15 一般病院2

2019年2月発行

発行：公益財団法人 日本医療機能評価機構
〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町1丁目4番17号 東洋ビル
TEL：03-5217-2320(代) / 03-5217-2326(評価事業推進部)
<https://jqhc.or.jp>

